

# スタチンで 肥満抑制

スタチン 1962年に堀江徳愛(とくなる)徳大教授(当時)によって初めて報告されたスタチン果皮に特有の成分。抗糖尿病作用などが確認されている。沖繩産シークワーサー含有の「ノヒレチン」と構造が似ているが、その機能は未解明だった。2007年、津嘉山正夫・徳大名譽教授と県工技センターが、マイクロ波を活用したスタチン抽出技術を開発し、特許を出願している。

スでも同様の研究を行い、インスリンの作用を改善する効果や中性脂肪量の低下を確認した。研究は、とくしま産業振興機構が文部科学省の補助で取り組む「徳島健康・医療クラスター事業」の一環。3月に京都市で開かれた日本農芸化学会大会で報告された。

## 果皮に含有 スタチンの効果確認

徳島県特産のスタチンの果皮に含まれる「スタチン」に、脂質の代謝を改善し、体重増加を抑制する効果があることが分かった。スタチンの具体的な機能が明らかになったのは初めて。効果を確認した酒井徹・徳島大学大学院教授(実践栄養学)と県立工業技術センターの研究グループは、肥満対策などへの活用が期待されるとしている。

## 徳島大・県工技センター

スタチンは有機化合物で、ポリフェノールの一類。研究グループは、高脂肪食を与えている肥満マウスに対し、体重1割当たり2割のスタチン(無害な有機溶媒に溶かして毎日投与。12週間後の内臓脂肪量と比較したところ、スタチン投与したマウスは、投与しなかったマウスの約半分だった。100割当たりの血中の中性脂肪量も、スタチン投与マウスが17・7〜50・3割だったのに対し、非投与マウスは24・0〜76・5割で、上昇の抑制が認められた。さらに、スタチン投与マウスは、

マウスの肝臓組織では、肝臓脂肪の分解にかかわる遺伝子(ホルモン感受性リパーゼ)の発現が増加。脂肪組織では、脂質を合成する遺伝子(アセチルCoAカルボキシルラーゼ)の発現低下が認められた。研究グループは、2型糖尿病(生活習慣型)のマウ

スタチン投与マウスは、投与しなかったマウスの約半分だった。100割当たりの血中の中性脂肪量も、スタチン投与マウスが17・7〜50・3割だったのに対し、非投与マウスは24・0〜76・5割で、上昇の抑制が認められた。さらに、スタチン投与マウスは、尿病(生活習慣型)のマウ

(湯浅翔子)